

日中対照言語学会第44回大会(2021年度春季大会)
のご案内

記

日 時 : 2021年5月23日(日)午前9時00分より午後5時00分(予定時間)
開催形式 : Zoom
参加費 : 無料(会員、非会員共通)

プログラム

- 総合司会 平山 邦彦(拓殖大学)
- 開会の辞 加藤 晴子(東京外国語大学) 9:00-9:10
- 研究発表1. 「多い/少ない」と「おびただしい」などの類義語の違い
—中国語の状態形容詞との比較から—
包 雅梅(大阪大学大学院) 9:10-9:43
- 研究発表2. 中国語の“可以”と日本語の「てもいい」の違いに関する対照研究
—基本的意味と場面的意味を中心に—
靳 博宇(麗澤大学大学院) 9:45-10:18
以上司会 勝川 裕子(名古屋大学)
- 休憩(10分間 10:20-10:30)
- 研究発表3. 再帰代名詞「自分」と“自己”の「抽象的行為」傾向について
—「意識主体(Subject)-自己(Self)」の観点から—
張 雨(名古屋大学大学院) 10:30-11:03
- 研究発表4. 脳内時空間文法—“过”“着”“了”について—
岡原 嗣春(関西大学) 11:05-11:38
- 研究発表5. 動詞の特徴から考える中国語の場面文における語順
謝 平(福岡大学) 11:40-12:13
以上司会 齋藤 貴志(麗澤大学)
- 昼休み(60分間 12:15-13:00)
- 理事会 13:00-14:00
- 研究発表6. 対象移動動詞のテイク・テクル形の格支配の量的分析
——本動詞の格結合頻度との比較を通して——
趙 金昌(筑波大学大学院) 14:00-14:33
- 研究発表7. 中国語母語話者によるテモラウ文の使用実態—IJASに基づいた分析を中心に
呉 丹(東京外国語大学大学院) 14:35-15:08
以上司会 森山 美紀子(東海大学)
- 休憩(15分間 15:10-15:20)
- 研究発表8. 中国語の自然会話における推意について
劉 羸(九州大学) 15:20-15:53
- 研究発表9. 「日本語と中国語の機械翻訳の現状—Google翻訳の使用例を中心に—」
豊嶋 裕子(東海大学) 15:55-16:28
以上司会 戦 慶勝(鹿児島国際大学)
- 閉会の辞 彭 飛(京都外国語大学) 16:30-16:40
- 会員総会 16:50-17:50

第44回大会（2021年度春季大会）
研究発表 テーマ・発表者と発表要旨

1.

テーマ：「多い／少ない」と「おびただしい」などの類義語の違い

—中国語の状態形容詞との比較から—

発表者：包 雅梅（大阪大学大学院）

要 旨：

日本語の数量を表す形容詞の「多い／少ない」は、装定の位置に現れにくい。その理由について、仁田（1980）は「多い／少ない」は修飾される名詞の内在的な属性を表していないためと指摘している一方、今井（2012）は、それらの類義語である「おびただしい、膨大だ、希少だ、わずかだ」など（以下、類義語類と呼ぶ）と異なり「多い／少ない」には存在の意味が含まれるために装定の位置に現れにくいと述べている。しかし、類義語類をより詳細に観察すると、必ずしも今井（2012）の一般化は成り立っていない。

中国語の「多／少」も装定の位置に現れにくいという特徴があるが、朱（1956）は「多」が装定できないのに対し「很多」ができるのは、後者が状態形容詞であるためであるとする。さらに、沈（1995）、張（2000）、蔺（2002）などの研究では、状態形容詞を「有界性」「描写性」「臨時性」という三つの性質によって特徴づけている。

本発表では、日本語の「おびただしい」などの類義語類にも中国語の状態形容詞の性質の一部が当てはまることを示し、それに基づいて「多い／少ない」と類義語類で装定可能性に差がある理由を説明することを試みる。

2.

テーマ：中国語の“可以”と日本語の「てもいい」の違いに関する対照研究

—基本的意味と場面的意味を中心に—

発表者：靳 博宇（麗澤大学大学院）

要 旨：

本稿は、中国語の能願動詞“可以”を日本語の複合形式「てもいい」と比べて、共通点と相違点の考察を行った。「てもいい」は逆接を表す「ても」に話し手の事態に対する評価を表す「いい」という複合形式である。通常肯定評価できない事態に対し、あえて「いい」という評価を与えるため、基本的意味は<許容>である。“可以”の基本的意味は<事態の発生が可能>である。“可以”と「てもいい」は話し手の許可を表す点で共通している。しかし、基本的意味の違いがあるため、“可以”が使えて「てもいい」が使えない（“这本书你可以看看。”）と「てもいい」が使えて“可以”が使えない（「雨が降ってもいい」）という2つの場合がある。前者は聞き手に話し手がいいと思う選択肢を勧める場合である。話し手の勧めを表すという積極的な評価の場合、「てもいい」は使えない。後者は話し手が事態の実現を許容する場合である。能願動詞“可以”は、積極的に事態を受け入れるため、消極的な事態

の場合には使えない。ただし、その場合に形容詞の“可以”は使える。つまり、形容詞の“可以”は事態の積極的な受け入れにも消極的な受け入れにも使えるが、能願動詞“可以”は積極的な受け入れにのみ使える。

3.

テーマ：再帰代名詞「自分」と“自己”の「抽象的行為」傾向について

—「意識主体 (Subject)-自己 (Self)」の観点から—

発表者：張 雨 (名古屋大学大学院)

要 旨：

日本語の「自分」と中国語の“自己”は目的語の位置に生起するとき、述語に「抽象的行為」の傾向が見られる。述語動詞が具体的な物理的動作を表す動詞の場合、「自分」と“自己”を目的語にとると、非文法的になることが多い。この場合では、その動作対象も具体的な身体部位でなければならない。ただ、動作の直接の対象でなく、連体修飾語に位置する場合であれば、再帰代名詞の適用性は高くなる。

(1) a. 自分を責める/磨く/守る…

b. *自分を打つ/触る/洗う…

→頭を打つ/顔を触る/手を洗う…

→自分の頭を打つ/自分の顔を触る/自分の手を洗う

(2) a. 犠牲/控制/埋怨…自己

b. *拉/洗/抬…自己

→拉手/洗头/抬腿…

→拉自己的手/洗自己的头/抬自己的腿

上の例から見ると、日本語の「自分」も中国語の“自己”も、直接関わっている動詞が抽象的意味を持つ動詞の場合、目的語の位置に生起する可能性が高いが、具体的な動作を表す動詞の場合、連体修飾語の位置でより自由に現れる。

しかし、この現象の原因について、先行研究ではまだ詳しく述べられていない。特に中国語における考察と解釈は、管見の限り殆ど見られない。日本語の再帰代名詞に対して、Hirose (2014) は以下のように指摘している。

The reflexive use [of zibun] represents the objective self of the agent of an action, i.e. the self that the agent (not the speaker) dissociates from his consciousness and treats like another person.

(Hirose 2014:101)

(「自分」の再帰的な用法は、アクションのエージェントの客観的な自己、つまりエージェント (話者ではなく) が意識から切り離されて別の人のように扱う自己を表す。

— 引用者訳)

この Hirose (2014) の指摘を基に、再帰代名詞の述語の「抽象的行為」の傾向に対して本研究では、Lakoff&Johnson (1999) の「主体-自己メタファー」(The subject-self metaphor)

を援用し、「意識主体 (Subject)―自己 (Self) 」の視点から原因の解析を試みる。英語と比べると、日中両言語の再帰用法は、[自己] が [意識主体] から切り離され、客体化される状況において容認される。この特徴を明らかにした上で、対照研究の手法を用いて、再帰用法の「自分」と“自己”の客体化されるレベルについて考察する。

4.

テーマ：脳内時空間文法―“过”“着”“了”について―

発表者：岡原 嗣春(関西大学)

要 旨：

人間は五感を持ち移動をし、移動経験を通して外界の情報を脳内に取り入れ、外界情報を脳内に「脳内時空間」として再構築する。この脳内時空間における観え方で単語や文法を生み出す。

本発表は中国語のアスペクト、特に“过”“着”“了”の脳内時空間との文法的関連性を観察する。

人間は五感を持ち「移動」する。風景が前から後ろに向かって動く視覚経験を基に「時」に空間位置表示語を付ける。中国語表現から《時の流れは向かい風》という認識が確認できる (Cf.岡原(2011))。つまり、「全てのイベントは自分の前方から接近し、身体を通り過ぎ、後方へと過ぎ去る」というイメージと、その逆方向のイメージを持っていることが確認される。

“V 过”を観察すると《イベントが身体を通過＝経験》という認識が存在しなければ、“V+过”で「経験」を意味する文法は生み出されなかったと言える。

“V 着”を観察すると《イベントが身体に付着＝持続》という認識が存在しなければ、“V+着”で「持続」を意味する文法は生み出されなかったと考えられる。

“了”を観察すると「移動(=変化)の相」を認識していなければ、“了”の様々な用法は生み出されなかったと考えられる。

5.

テーマ：動詞の特徴から考える中国語の場面文における語順

発表者：謝 平(福岡大学)

要 旨：

現代中国語の基本語順は「主語＋動詞＋目的語」であるが、場面文(本発表では「出現・存在・消失」の意味が含まれるすべての文を「場面文」と呼ぶ)の場合は、以下の例で示すように四つの語順になることが可能である。

- (1) T 描写対象＋P 発生場所＋A 動作行為 ex. (有)人在门外站着。
- (2) T 描写対象＋A 動作行為＋P 発生場所 ex. (有)人站在门外。
- (3) P 発生場所＋A 動作行為＋T 描写対象 ex. 门外站着人。

(4) P 発生場所 + T 描写対象 + A 動作行為 ex. 門外有人站着。

しかし、場面文であれば、すべてこの四つのパターンの生成が可能であるというわけではない。これまでの先行研究では、(3)のようなパターンが存現文と呼ばれており、描写対象の「不特定性」や動詞部の特徴から生成可能な要因について研究されてきたが、上記の四つのパターンをすべて取り上げて考察する研究はほとんどない。

本発表では、描写対象の「定」、「不定」を考察の対象にせず、描写対象及び発生場所との関係から場面文に用いられる動詞の中の典型例を中心に、その意味特徴を考察する。また、上記の四パターンの生成について動詞の意味特徴と結びつけて分析することを試みる。

6.

テーマ：対象移動動詞のテイク・テクル形の格支配の量的分析

—本動詞の格結合頻度との比較を通して—

発表者：趙 金昌(筑波大学大学院)

要 旨：

現代日本語では、「V テイク」と「V テクル」は大きく分けると、空間的移動を表す場合とアスペクトを表す場合とがある。本発表では、前者を移動形式、後者をアスペクト形式と呼ぶことにする。本発表は空間的移動を表す「V テイク」と「V テクル」に重きを置いて議論を進めたい。「V テイク」と「V テクル」について、これまで様々な分析がなされ、森田 (1968) ; 寺村 (1984) ; 今仁 (1990) ; 近藤 (2000) などは両形式の意味や本動詞との共起関係に関する代表的な研究として取り上げられる。本発表は「V テイク」と「V テクル」の本動詞を対象移動動詞に絞って考察を行う。対象移動動詞は〈移動性〉という素性を持ち、カラ格・ニ格・ヘ格・マデ格と結びつくことが可能である。対象移動動詞のテイク・テクル形は本動詞の〈移動性〉という素性を受け継いで、カラ格・ニ格・ヘ格・マデ格と共起することが想定できる。しかし、本動詞にテイク・テクルを付加することによって共起可能な格と格結合頻度に影響をもたらすことが判明された。本発表は本動詞の格結合頻度との比較を通して、テイク・テクルは対象移動動詞の格結合頻度にかなる影響をもたらすかを明らかにした上でその影響は動詞の意味によるものかテイク・テクルの振る舞いによるものかを究明したい。

7.

テーマ：中国語母語話者によるテモラウ文の使用実態—IJAS に基づいた分析を中心に

発表者：呉 丹(東京外国語大学大学院)

要 旨：

テモラウ文は意味が多種多様であり、また使用する際に視点の制約があつて、さらに似通う他の構文(テクレル文や使役文、受身文)が存在するため、その習得は学習者にとって難しいと指摘されている。これまでは、テモラウ文を含め、授受補助動詞文の意味的・構文的

特徴や日本語の授受補助動詞と他言語との対照、授受補助動詞文の指導方法などが考察されてきた。しかし、中国語を母語とする日本語学習者によるテモラウ文の使用実態についてはまだ明らかにされていないようである。本稿では中国語を母語とする日本語学習者によるテモラウ文の使用実態を、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS)に基づいて調査し、日本語母語話者の使用状況と比較する。そして、学習者の誤用の出現する要因を探り、効果的な教授法を提案する。

8.

テーマ：中国語の自然会話における推意について

発表者：劉 轟(九州大学)

要 旨：

本研究は関連性理論の立場から中国語の自然会話における強い推意 (strong implicature) と弱い推意 (weak implicature) について考察を行う。Sperber & Wilson[1986]1995 によれば、強い推意の場合、聞き手の関連性の期待を満たすための推意前提と推意結論が、それぞれ一つしか存在しないため、命題がどれなのかが明白である。一方で、弱い推意の場合、聞き手の関連性の期待を満たすための想定が多数あるため、命題がどれなのかが不明となる。したがって、その判断は聞き手にゆだねられ、どのように解釈するかは聞き手の責任となる。これまで、現代中国語の自然会話における強い推意と弱い推意について詳細な考察を行った研究は未だ見られないため、本研究ではまず中国語の自然会話における推意の使用実態を明らかにした上で、関連性理論に基づいて推意の解釈過程を論理的に説明し、強い推意と弱い推意が用いられやすい文脈の特徴を解明する。

9.

テーマ：日本語と中国語の機械翻訳の現状—Google 翻訳の使用例を中心に—

発表者：豊嶋 裕子(東海大学)

要 旨：

2020年度に遠隔授業を行った際、学生からの提出課題・答案に、複数に共通する不自然な誤りが目立った。そのほとんどが、Google翻訳 (以下G訳と略記) の翻訳結果のコピーと判断されるものであった。

2020年11月に授業内で行った無記名アンケートでは、発音学習段階の0)を除き、G訳はいずれも高い使用率が示されている。(％は四捨五入)

中国語の自習にG訳を	使用したことがある	時々・よく参考にする
0) 学習歴2か月 A校	9 / 65 (14%)	4 / 65 (6%)
1) 学習歴8か月 A校	44 / 51 (86%)	28 / 51 (55%)
2) 学習歴8か月 B校	28 / 32 (88%)	17 / 32 (53%)
1) 2) 小計	72 / 83 (87%)	45 / 83 (54%)
3) 学習歴1年以上 A校	18 / 21 (86%)	14 / 21 (67%)
4) 学習歴1年以上 B校	46 / 48 (96%)	34 / 48 (71%)
3) 4) 小計	64 / 69 (93%)	48 / 69 (70%)

0) ~ 4) 総計	145 / 217 (67%)	97 / 217 (45%)
1) ~ 4) 計	136 / 152 (89%)	93 / 152 (61%)

アンケート後「自身で正誤判断ができない段階では学習の妨げになる」ことを理由に、翻訳機能全般を使用不可としたが、学生のG訳使用傾向は依然として続いている。

翻訳課題で習得度を正確に判断するには、教員側が機械翻訳の特徴、機能を把握した上で出題することが望まれるであろう。

本発表では、G訳を中心に具体的な使用例を紹介し、初歩的な検討を試みたい。